

都市めぐりを書きはじめた頃から北京市と上海市は書くか書くまいか逡巡していた。この両都市は書くべきものがあまりに多いのでまとまりがつかなくなるのではと心配していたからである。



私は大連に赴任していた2年間で北京市を4回ほど訪れた。2回は仕事、2回はプライベートな遊覧である。

第1回目は、大連着任の5日後に、北京でグループ企業の懇親ゴルフコンペ参加要請があった時である。

その時まで北京には1度も行ったことがなかったので勇躍参加した。ゴルフクラブ(本物のゼクシオ)は日本に置いて赴任したので部下に聞いて2000円で假的(にせもの)のゼクシオのフルセットを購入した。北京空港は予想通り大きかったが、あまり強い印象は残らず、到着するとすぐバスでゴルフ場へ移動した。場所は飛行場から比較的近い順義という町の郊外にある立派なゴルフ場であった。

中国国内でゴルフをプレーするのはその時が初めてだったが印象に残ったのは、キャディーの私たちへの対応であった。プレーが終了後、キャディーが一人一人にキャディーへの勤務評定をつけるカードを手渡した。記入後、キャディーマスター室のそばの日本風といえば優・良・可の三つのポストに入れるのだ。その評価により給与が大きく変動するしくみのようだ。キャディーは殆どが若くて元気がよく、またグリーンの芝目など正確に教えてくれて、よく教育されているように思った。全体的には想像していたよりいい印象を受けた。余談だが、2千元のクラブは本物とはやはり違うが、プレーには問題はない品質であった。2年後帰国したときは、大連の会社に寄付をした。

翌日は、早朝また貸切バスで出発し、昨日とは違うゴルフ場へ向かった。1泊2日の日程なので翌日は観光かなと期待していたが、殆どの人が北京を充分経験しているらしく、観光をするという話は出なかった。新参はただついて行くだけである。この日はゴルフが終ると約20名の参加者は中国各地に散った。大連から参加した数名もすぐ機上の人となった。第一回目は、あの北京に来たんだ、という実感は全くなかった。



2回目は2008年8月。北京オリンピックが開かれていた時である。運良く開催時に中国に居るのだから何とか機会を見つけて行きたいと思っていた。8月8日(中国は本当に8という数字が好きである)から北京五輪がスタートした。出来ることなら張芸謀の演出による開会式をこの目で見たかったが望むべくもなく、テレビですさまじいまでの演出を堪能し、その後改めてDVDを購入した。オリ

ンピックも残りあと一週間で閉幕だなーと思っていた矢先、中国人の友人が「野球の試合のキップを持っているが、興味がないので200円で買わないか」と言って来た。

すぐさまOKし、旅行社に行って飛行機等の手配をした。そのチケットを見ると、試合は8月22日で日本対韓国の準決勝戦で願ってもないカードであった。一般的に中国人はあまり野球に興味がない国民性のようなだ。

当日は晴天で熱中症になりそうな暑さだったが、北京五輪をこの目で見ているのだという感慨の方が上回っていた。試合は、日本チームは打たないわ、エラーを続出するわで全く韓国のワンサイドゲームとなり情けなくなった。球場は五棵松球場であった。この後オリンピックのメイン施設に向かった。

北京五輪で有名なところといえば「鳥の巣」と呼ばれるスタジアムと「水立方」と呼ばれる室内水泳場で、この二つを見なければ北京五輪を見たとはいえないほどだが、しかし「鳥の巣」の周囲は竹矢来のようなフェンスが続き、あちこち歩いてようやく入場口らしいところに来たが、キップがなければ入れない。仕方なくフェンスの合間から写真をとるだけである。仕方なく近くにある「水立方」へ移動したが、ここも外観を写すだけであった。この二ヶ所はいつかまたゆっくり見に来ようと思い、市内に戻ることにした。

一日目は、炎天下の野球見物と、中に入らせてもらえなかった五輪施設を見て疲れてしまった。ガイドに夕食は涼しいレストランで北京ダックを食べたいと言うと「好的」と言って「全聚徳」の王府井店に案内してくれた。店のパンフレットを見ると「京師美饌、莫妙干鴨」「全聚徳始建于清同治三年(公元1864年)、距今已有一百四十余年的悠久历史」と書いてある。私流に翻訳すると「北京の美食はこの上ない美味のアヒルに尽きる」だが、意識しすぎであろうか。次は「この店は1864年創業で、今からすでに



池に映る五輪スタジアム・「鳥の巣」

140年余りの悠久の歴史を有している」とある。少しして料理が出て来たが食べきれないくらいたくさん出た。

日本では北京ダックの皮だけをパリパリ焼いたものをねぎといっしょにくるんでタレにつけて食べるが、本場のものはむしろ白身の部分を味わうようになっていた。本場で食べていると思うと余計美味しく感ずるもので、つらい一日目の最後がハッピーエンドで終わることができた。

翌日はまず天安門広場に行く。さすがに広い。そしてテレビのニュースでよく見る天安門は現実に目にすると、迫力があり貫禄充分なたたずまいである。1949年10月にあの楼上で毛沢東が建国宣言をしたのかと思いつつ、壁面に掛かっている畳何枚分あるのか分からないほど大きな彼の肖像画をながめ、中国人は何でも大きいのが好きな国民なんだなという印象を持った。

この周辺は「近代」と「現代」を凝縮したところである。キップを買って天安門から中に入るとそこにはあの紫禁城が幾重にもいらかを重ね、この上なく歴史の重みを余すところなく伝えてくれる。まだたった100年余り前でしかない時代——今年には1911年の辛亥革命からちょうど100周年である——本当にこの場所で

西太后がとりまきの宦官と共に辣腕を振っていたのであろうか、信じられないが真実なのである。一般的に彼女は悪いイメージだが、あの時代背景の中で、しかも政権末期の、骨太の皇帝候補の男性が見当たらない中で国をとりしきった強さは驚嘆に値する。

故宮を通り抜け反対側の神武門から出ると、道路をへだてて景山公園である。公園内にある景山は紫禁城の外堀を掘ったときの土でつくられた山だそう。高さは43mとあまり高くないので上まで登ってみたが、山頂にある万春亭から見た眼下の故宮の風景は見事な一幅の絵である。これぞ中国一の眺めと言っては過言だろうか。いや、天壇公園とそこに鎮座する祈念殿も素晴らしいが、紫禁城の中で展開された明から清への500年にわたる権力闘争の歴史を重ね合わせてみるとやはり中国一ではないか。

清は明を打ち破り、1644年、3代目の順治帝の時にこの城に入城したが、以来260年以上少数民族の満州族が当時3億人はいたであろう漢民族を支配した事実は重い。

この景山公園は、また、亡ぼされた明の最後の崇禎帝がこの山のふもとにある木で縊死したことで有名である。その場所にはおそらく植えかえられたであろう木の下に説明板が設置されている。人生のはかなさを思い知らされる。

「近代」に関しては、この程度として「現代」について少し

ふれてみる。紫禁城は観光名所となったが、すぐ近くに清に替わる現代の権力の象徴とも言えるものがある。一つは人民大会堂である。ガイドブックには日本の国会議事堂に相当すると安易に書かれているが、全く異なるものである。この建物の中の一番大きい会場である万人礼堂は1万人の収容が可能らしいが、どこが日本の国会議事堂に相当するのか分からない。

議事堂は質疑応答を行うところであるが、大会堂は主席や総理が一方的な演説をする場に過ぎない。その場に出席できる人の選出経緯は全く異なる。人民大会堂は一部しか見学できず、中がどのようなになっているか分からないが外観で見る限り、国会議事堂の方が、デザイン、

荘厳さ、歴史などどれをとっても優れている。

建築の話を敷衍すると、中国は建国時に歴史に残る十大建築物を北京市内に建てた。列举すると、

- ①人民大会堂
- ②中国革命歴史博物館
- ③中国革命軍事博物館
- ④全国農業展覽館
- ⑤北京駅
- ⑥北京工人体育館
- ⑦北京民族文化宮
- ⑧民族飯店
- ⑨釣魚台国賓館
- ⑩華僑大廈

である。半分くらいしか見ていないが、この中でも北京



北京駅



北京西駅

駅は駅舎のデザインがとても好きである。一度見たら忘れられない美しさだ。北京西駅も堂々として素晴らしい。中国の駅舎の多くは味わいがある。日本の駅は東京駅など一部を除き、殆どマッチ箱のようなデザインである。お寺の屋根のように美しかった長野駅も建てかえると、どこにでもあつまらない駅舎となった。中国の駅は、たとえ箱のような駅舎でも一番上は屋根瓦をふき、東洋的な美を感じさせる。

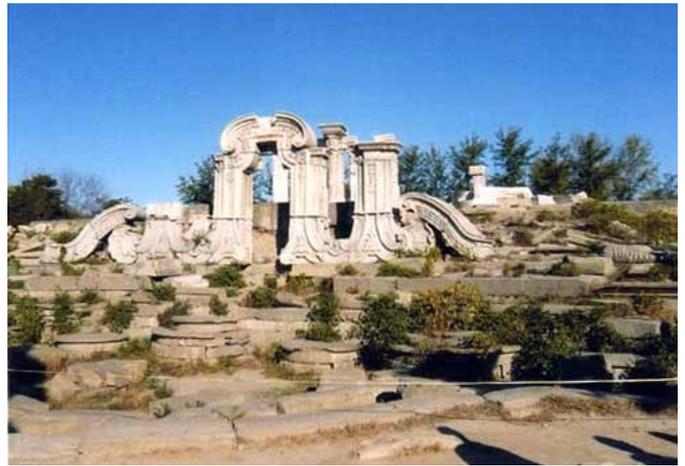
人民大会堂は、大きく立派であるが、せめて台湾の台北市にある圓山大飯店のような外観が中国的でよかったと、少し残念である。あるいは同じく台北市の故宮博物院のような建物でもよい。やはりあの場所に建てるのであれば紫禁城とのデザインの一体性を持たせるべきと思った。もう一つの象徴は中南海という場所である。中に入れないしコメントのしようがないが、要は共産党幹部の居住区、高級住宅街である。

景山公園を後にして、圓明園に向かった。途中清華大学のそばを通った。ここで胡錦濤が勉強したのだなと思った。成績はどうだったのだろうか？ 学生時代からあんな堅物の感じだったのだろうか？ と考えていると、「圓明園遺址公園」と書いてある入口に着いた。足を踏み入れて呆然となった。この有様はいったい何だろう。大理石の柱が散立はしているが、建物が当時どのような形であったのか全く見当すらつかない。勝手に想像するしかない。よくもこれだけ徹底的に破壊できたものだと感心するくらいだ。

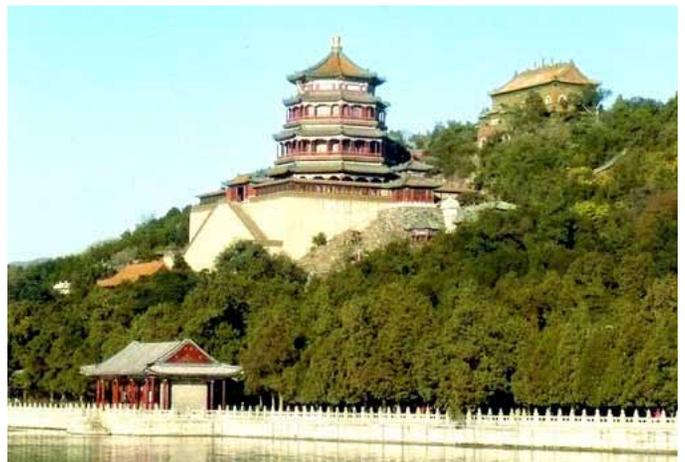
この公園とこの後訪れた頤和園は、1860年に英仏連合軍が中心となって徹底的に破壊し、さらに国宝級の「四庫全書」をはじめとする極めて貴重な書物を焼き払い、おまけにおびたしい財宝を本国に持ち帰った。昨年だったか、ヨーロッパのオークションでこの圓明園にあった動物のブロンズ像が売りに出され、中国が返還を求めたとの記事が出ていた。以前にも「牡丹江市」の中で書いたが、私が不思議に思うのは、アヘン戦争であれだけ蹂躪され、これだけの名園を破壊されても、中国では英国を悪く言う人にお目にかかったことがない。一体どうなのであろうか。

圓明園は、雍正帝がつくったものを乾隆帝が大幅に改修、西洋風の壮麗な宮殿だったらしい。中国一の乾隆帝の思想が表現されていたであろう宮殿を見ることができないのは誠に残念至極である。ここは頤和園と違ってユネスコの世界遺産となっていないが、英仏の残虐行為を後世に知らしめる遺産として登録すべきではないか。そう思いつつ次は頤和園に向った。

頤和園は1860年に英仏軍に破壊されたが、この公園は西太后により1891年に復元されている。本来なら軍備の充実に使うべき資金を復元費用に流用したため、日清戦争にも負けたと書いてある本もあるが、当時の両国の勢いからしても遅かれ早かれ破れたであろう。



英仏連合軍に破壊された圓明園の遺跡



頤和園のハイライト・仏香閣此。処から眺める昆明湖の眺望は絶景である

さてこの頤和園はいかにも素晴らしい。美しい杭州の西湖にならった昆明湖とその水面に倒影される雄大な佛香閣、湖畔に沿いそこに連なる長廊は「ようやく北京に来たのだ」という満足感を充たしてくれる。佛香閣は4重の八角形の屋根をかぶせ高さは40mもある。60mの人工の山である万寿山の頂上近くにあるのでその荘厳な美しさがひととき目立つ。乾隆帝が建てたようだが彼の豪放磊落な性格が表れていると感じた。

この頤和園には多くの建築物があり、とても紹介しきれないので前述の「長廊」だけ紹介したい。長さ728mで区画毎の天井等には美しい色彩の絵画がはめこまれた画廊でもある。約14000点あるが1つとして同じ絵はないそうだ。紅樓夢・西遊記・水滸伝・三国志などからの題材で描かれているが、世界一美しい廊下ではないか。いったい何人の絵師が動員されたのか知らないが、このこと1つとっても当時の権力者の力が想像できようというものだ。これらによりこの庭園は堂々と1998年にユネスコの世界遺産となった。到着した時は午後を少しまわっており、めぐるうちに夕暮がはじまってきたが、きれいな夕焼けにそまりつつある遠くの山々と昆明湖の色彩の変化は筆舌に尽くし難いものであった。

(続く)